

いま ここにある風景 (Edward Burtynsky; Manufactured Landscapes)

2008(平成20)年8月10日鑑賞(テアトル梅田)

★★★



監督・製作＝ジェニファー・バイチウォル／撮影監督・音響デザイン＝ピーター・メトラー／出演＝エドワード・バーティンスキー(写真家)(カフェグルーヴ、ムヴィオラ配給／2006年カナダ映画／87分)

チャン・イーモウ
……張 藝 謀監督の演出で魅せた、北京オリンピック開会式の歴史絵巻の豪華絢爛さには世界中がビックリ、ウットリ！ それもホントの中国の姿なら、この映画にみる残酷な映像の数々もホントの中国の姿……。世界の工場、石炭・石油、造船そして都市。中国の「いま、ここにある風景」をしっかり確認しながら、北京オリンピックを観戦し、今後の中国の方向性を真剣に考えなければ……。

観たい映画 vs. 観なければならない映画

チャン・イーモウ
張 藝 謀監督の演出によって、2008年8月8日午後8時08分に始まった北京オリンピック開会式は、日本中のそして世界中の人々の度肝を抜いた。開会式の平均視聴率は関東37.3%、関西35.9%、また番組視聴占拠率は関東56.2%、関西53.4%で、テレビをついている世帯の半分以上が開会式を観ていたことになるとのこと。

これは国威発揚を第一義として中国の総力を挙げた努力の成果であり、たしかにこれも中国のホントの姿。しかし、開会式の2日後の8月10日に私が『いま ここにある風景』で観た中国の姿もホントの姿。前者はじっとしていても自然にテレビで観ることができるが、後者は自分でアンテナを張り、情報を集め、しかも自分から映画館へ足を運ばなければ観ることができないもの。私は世の中には観たい映画の他、観なければならない映画があると考えているが、まちがいなくその1本がコレ。

思い出したのは、『世界残酷物語』

写真家エドワード・バーティンスキーのカメラが撮る写真は、ひどく残酷でショッ

キングな印象が強いが、同時にすごく美しい。そんな写真を中心とし、ピーター・メトラーが撮影監督と音響デザインを務め、ジェニファー・バイチウォルが監督したこの映画が、スクリーンに映し出す数々の「いま　ここにある風景」は息を呑むシーンの連続。

そんな映像を観ながら私が思わず思い出したのは、私が中学2年生の時に映画館で観てショックを受けた『世界残酷物語』(62年)。これは、テレビもまだ十分に普及しておらず、海外旅行など夢のまた夢だった時代に、世界の奇習や風俗を生々しく描いたドキュメンタリー映画。そこにはさまざまなショッキングなシーンが登場したが、とりわけ中学2年生という感受性の鋭い時期の私の印象に残ったのは、①ニューギニアで豚に授乳する女性、②ネパールの牛の首を切る祭り、③原爆実験で方向感覚を失って海に戻れなくなった海亀など、そのタイトルどおりの残酷な現実。

同時に強く耳に残ったのはリズ・オルトラーニによる美しい主題曲『モア』。残酷シーンが続出する映像には全く似つかわしくないこの美しい主題曲は、アカデミー賞にノミネートされた他、アンディ・ウィリアムズなどが歌って世界的に大ヒット。今や英語曲のスタンダードナンバーとして、カラオケでもよく歌われる名曲となっている。

しかし、私はなぜ『いま　ここにある風景』を観て『世界残酷物語』を連想し、思い出したの……？

映画 8分間、ノーカット、750m

この映画の冒頭のシーンには誰もが唖然とするはず。冒頭、カメラが映し出すのは、何の変哲もない工場の中の生産ライン。何を組み立てている工場なのかはわからないが、カメラはゆっくり移動しながら何本も続く生産ラインを追っていく。その間音楽も解説もなしだから、基本的には退屈で、次に何が出てくるのかを楽しみに待つしかない。ところが何と、この冒頭シーンがノーカットで8分間も続いていくからビックリ！

工場内をカメラが移動した距離は端から端まで何と750mもあるとのこと。中国の人口13億人は1.3億人の日本の約10倍だが、中国旅行を十数回経験した私が目安にしているのは、中国は何でも日本の10倍の規模で考えればいいということ。したがって、工場の大きさも日本の約10倍と考えれば納得がいく。明治政府の下で富国強兵政策を

とり、紡績を中心として産業革命を実現してきた日本には巨大な養蚕工場があったが、『いま　ここにある風景』の冒頭に映し出される某巨大工場はまさにその10倍の規模……？ 「世界のトヨタ」が世界中にいかに巨大な工場をつくろうとも、中国は常にその10倍の規模でそれを更新していくと考えなければ……。

映画「産業の風景」その1——「世界の工場」としての中国

この映画の原題は『Edward Burtynsky: Manufactured Landscapes』、つまり『産業の風景』。カナダ人のエドワード・バーティンスキーは25年間にわたって「産業の風景」を撮ってきた写真家で、この映画はここ10年の彼の作品の旅路を追ったもの。そして、この映画は、彼の「産業の風景」という大テーマを、さまざまな対象に具体化して映し出していく。その第1は、映画冒頭の「世界の工場」としての中国。そしてそれに続くのが大量の電子製品のリサイクル工場としての中国だが、その姿はかなりグロテスク。鉛、カドミウム、水銀等の有害物質の行方は……？

映画「産業の風景」その2——造船、石炭

この映画が映し出す「産業の風景」その2は、中国の港湾地区の造船所における造船の風景。8月8日の開会式で張藝謀監督は巨大な絵巻物の上に、①紙、②活版印刷、③羅針盤、④火薬という中国の「四大発明」をモチーフとするストーリーを展開させた。

その羅針盤のテーマで登場したのが「鄭和」(1371~1434年)の姿。彼はヨーロッパの大航海時代に先駆けて明の時代に登場した武将。そして彼は、羅針盤を活用してスリランカ、マラッカ、セイロンという南海の航路を開拓して中国人をはじめて「海の道」に進出させた海の英雄だ。

21世紀に入り、中国はあの時代の「海の夢よもう1度」とばかりに「海洋国家」を目指しているが、そのために不可欠なのが造船技術。「90年代初頭にはここでは船は造られていなかった」と若い女性が語るこの地区で、次々と造られている船は、さらなるグローバリゼーションを可能にするものだが……。

他方、今は何でも石油だが、かつて中国の経済発展を支えた重要なエネルギーが石炭。撮影隊は中国最大の石炭流通センターを撮影しようとするが、そこには中国当局によるさまざまな障害が……。

「産業の風景」 その3——船舶解体と石油

この映画は中国の「いま、ここにある風景」を描いたものだが、1つだけバンガラデシュのチッタゴンにおける船舶解体の姿が映し出される。巨大なタンカーを人海戦術で解体していく姿にはビックリ。もちろん、これは生活費を稼ぐためだが、こんな危険で健康を害する仕事に従事するのは20代の若者だけで、30代はいないらしい。タンカーの船底に残った原油を素手でかき出している若者たちの姿を観ると、思わずゾッとしたさせられる。

そんな風景に対比させられるのが、石油採掘場、数千台の車の列、捨てられたタイヤの山、おもちゃか未来小説のように複雑に入り組んだ高速道路の都市などさまざまな風景。20世紀の地球のつくり変えの原動力となったのが石油であることを、エドワード・バーティンスキーはナレーションでも強調していたが、そこで注目されるのは中国の地位。「石油パーティー」は20世紀に入ってから始まったが、そこに遅ればせながら入ってきたのが中国。そして今、中国はラストダンスを踊っている、というのがエドワード・バーティンスキーの捉え方だが……。

「都市問題の視点から——三峡ダムと上海

この映画には「産業の風景」と言えなくもないが、それよりも私がライフワークとしている「都市問題の視点」と言った方が適切なテーマが2つ映し出される。それが、三峡ダムと巨大都市化する上海だ。三峡ダムについては、ナレーションによってその全体像が語られ、また、2002年時点でのダムが建設されれば水没する長江沿いのまちの取り壊し風景が映し出されていくが、その描写はやはり、賈樟柯監督の『長江哀歌』(06年)の方が上……。

ジャ・ジャンクー

それに対して、「上海都市計画展示室」における観光客に対する解説に始まる、巨大都市化する上海の描写はすばらしい。8月22日～24日に3度目の上海旅行が控えている私としては、これを大いに参考にしたい。そして2010年に開催される上海万博までに上海がさらにどのように変容していくのか、私は都市計画の観点から興味深く見守りたい。

2008(平成20)年8月11日記